

# みどり魚 うお

原子 修

空が、ぐらりと、傾いた。

夕寒が、晩秋のベンチを、泣いた。

——今夜こそ 死ねる

飲まず食わずの瘦躯を、虚空のようにならした。

人気の失せた公園の闇に、入水した。

凍てたコンクリートの 堅穴式住居の渚へと、漂着した。

——お邪魔して、ご免なさい

施錠された円蓋式の記念物の内部で、団欒の火をかこんで

いるはずの、三人の縄文人家族の人形にささやいた。

——今晚限りの お許しを

力つきて、倒れ、意識を失った。

デデデンダダドドドドドドッ

響きたかい太鼓の打音で、ハッと、我に帰った。

いつの間にか、堅穴式住居の炉端に横臥していたのだ。

黒衣に赤い渦巻紋を描いた縄文人の男が、太鼓を打つ手を

——さ、外に出しましょう。この辺りの、五千年前の世界を

ご覧よ。

三人の縄文人の家族が案内してくれた、今は目黒台とよばれる一帯の、何という壮観！

大量の木の実をもたらす栗・団栗の自然林：猪・鹿・穴熊

の狩の場となる森：蛤・浅蜷・潮吹貝・大和蛸などの貝類や

黒鯛・鯨・河豚等の魚類や、鯨などの漁の場となる目黒川と

入江の海：そして、大自然の無限の恵みに心からの感謝と祈

りを捧げる祭祀の場でもある貝塚…。

——森・台地・川・海と共に暮らす知恵と心が、縄文人を、

一万年以上も大きな争いのない世界へと導いたのです。

さ、広場に参りましょう。地と水と火と風の祖霊様達へ

の感謝をこめて、今日は、野焼き土器祭りを盛大にとり

おこなうのです。

——それを今日に決めたのには、何か仔細が？

——大あります。どんな時でも大自然の理に従うことを宗

とするわれら縄文人は、まず、秋の落葉の候を選びま

す。野焼きの当日雨が降らぬよう、また大風が吹かぬ

よう、水と風の祖霊様への祈りも欠かせません。薪に

点火する際は火の祖霊様に祈って、火がまわり水蒸気

が吹きあがるのを合図に一気に温度をあげ、ひび割れ

のない土器が焼きあがるよう気を配らねばなりません。

とめ、ひげ面いっぱい微笑の花をほどいた。

——今日は、待ちに待った野焼き土器祭りの日じゃ。

さ、われらの醸したサルナシの実の酒を、ぐっと呷って、

地の大祖父に感謝の踊りを捧げようぜ！

赤衣に黒い流紋美を描いた縄文人の女が、精緻をきわめた

祭祀用の注器を傾け、秘儀の酒を盃に注いだ。

——ここは、湧き水の郷です。美酒を生みだす佳境です。

さ、水の祖霊の大祖母も、今日のお祭にはおいでなさ

います。共に、よろこび迎えましょう！

炉端から、貫頭衣をまとった幼い少年が、ういういしい声

を張りあげた。

——野焼き土器は、火の大祖母なしにはできないよ。

少年の頭を愛撫して、父親のひげ面が、笑った。

——そして、強くもなく弱くもない、程良い風を送ってく

れる風の大祖父の助けもね。

喉越しにさわやかな酔いの光をともし地酒に煽られ、がば

と起きあがって、三人の縄文人家族に、頭をさげた。

——ありがとうございます。

私ごとき、放射線障害による白血病ですべてを失い、今

は路頭をさまよう哀れな二一世紀人を、心こめて迎えて

いただき、お礼の申しようありません。

涙声の謝辞をさえぎって、父親の縄文人が、立ち上がった。

こうして、われらの魂をこめた土器が完成するのです。

点火と同時に祭りがはじまり、太鼓の音に合わせて人びと

が薪を火に焼べる舞いをはじめたとき、二一世紀人が、絶叫

した。

——わたしを、縄文人にしてください！

父親の縄文人が、鋭い声をあげた。

——自然の理に背くという二一世紀人の構造悪の鱗を背負

っている限り、先祖の縄文人の懐に帰ることはできな

いぞ！

とつきに、最高温に達した野焼きの火にむかって、二一世紀

紀人は、脱兎のごとく、走った。

——火よ、縄文の火よ！

わが肉体をおおう文明の鱗を、焼ききよめたまえ！

と叫びつつ、猛火に飛び込み、灼熱のほむらに、身を投げ

た。

夜が、明けた。

事もなげに静まりかえった早朝の公園を散歩する一人の老

人は、縄文の火でみそぎされた緑の鱗が、風のまにまにきら

きら舞いあがり、美しい魚のかたちを描いて湧き水のせせら

ぎに沈むのを、見た。